



# 吉岡拜山と明治維新

吉岡拜山は、幕末から大正期を生き  
た太宰府出身の漢詩人、文人画家です  
が、明治維新と拜山との関わりについ  
て、いくつかの史料からうかがってみ  
ましょう。

拜山は、元治元(1864)年、19歳  
で日田の私塾咸宜園に入門しました。  
しかし、慶応2(1866)年、第二次  
長州征伐に際して小倉城が落城すると、  
敗兵が逃げ落ちてきた日田も大混乱と  
なり、拜山はやむなく太宰府  
へともどつてきます。

同3年春、京都に上り南画  
家中西耕石の門を叩き画道  
に志しますが、翌年(慶応4  
年・明治元年)、明治維新を  
迎えて京都も騒然となり、一  
方で明治政府が書生の採用を  
始めたことから、耕石のもと  
を辞して、倉敷県書記局に奉  
職し、官吏となりました。拜  
山の明治元年の日記、十月五  
日の項には、明治新政府と旧幕府勢力、  
奥羽越列藩同盟の間に起こった戊辰戦  
争のうちの東北戦争に関する記述がみ  
えており、同席した者は、官吏として  
新政府軍勝利の報に思わず快哉を叫ん  
だと記しています。

明治11(1878)年、拜山が清国  
(中国)を来訪し、その名所旧跡を訪ね、  
文人たちと交流をもったことについて  
はすでにふれたことがあります(『年報



太宰府学』10号)。この時に記された  
清国の人びととの「筆談録」にも明治維  
新にかかわる記述があります。たとえ  
ば、日本における官吏登用法について  
尋ねられて「戊辰(明治元年)以来、大  
政一変、時に改革ありて、考試の法、  
未だ確定せず」と答えています。別の  
箇所でも、どのようにして官吏となっ  
たのかを問われ、「弟(拜山が自らを謙  
遜した自称)、固より才なし、徳なし、  
芸なし、最も門地裔にあらず。  
只、人の成事に因りて驥尾に  
附すのみ」また「我が邦、十年  
前に覇政、今、王政に属す。  
較拳人等の道、始めて開かれ、  
いまだ完全ならざるなり」と、  
明治新政府の官制の未整備に  
言及しています。これらは、  
拜山の前歴を知った清国の文  
人たちが、自らの国と比較す  
るため、日本の実情を尋ねた  
ものでしょう。

こうしてみると、拜山にとっての明  
治維新は、画道を捨てて官吏となると  
いう、人生のひとつの転機だったと思  
われます。拜山は、その後も東京に転  
職となり官吏を続けますが、明治4(1  
871)年、不慮の事故により右手を  
失い、以降、官吏としての立身出世を  
諦め、隻腕の文人墨客として生きる道  
を志すこととなるのです。

太宰府市公文書館 重松 敏彦